

II 特別シリーズ II

科学技術 振興機構 『さくらサイエンスプラン』 友情と感激

第121回

産業医科大学の活動報告



東 敏明 (産業医科大学学長・国際交流センター長)

「フィジーの働く人の健康を守る 基盤づくりのために」11名を招聘

世界で唯一、働く人の健康を守る産業保健を中核にした産業医科大学では、平成29年12月4日から10日までの7日間、さくらサイエンスプランによるご支援のもと、フィジー国立大学医学部の学生8名、大学院生2名、引率教員1名の計11名を受け入れました。

今回の交流は、産業保健の基盤が弱いフィジーにおいて、将来、働く人の健康を守る人材を輩出したいというフィジー国立大学の意向を受けて、学生、院生の方々に日本の産業保健システムを実際に見聞していただき、産業保健の意義と重要性を肌で感じてもらうことを主な目的としました。

12月の平均気温が25℃というフィジーから冬の福岡空港に降り立った一行は、体験したことのない寒さに興奮しつつ、無事に産業医科大学に到着しました。

翌日は、学長からの歓迎あいさつでプログラムがスタートしました。開講式の途中で雪



福岡空港に到着した一行



1日目	福岡空港到着、ゲストハウスチェックイン、オリエンテーション
2日目	開講式、学内見学、本学紹介、フィジー国立大学の紹介
3日目	講義(日本・世界における労働衛生対策、日本の産業医制度、産業保健の歴史) 国際遠隔講義
4日目	ストレス関連疾患予防センターの紹介とストレスチェック実習 講義(職業中毒、じん肺・アスベスト) 学長・学生との懇親会、北九州市エコタウンセンター・健康診断施設の見学
5日目	講義(職域メンタルヘルス、産業保健とCSR、健康経営)、閉講式
6日目	北九州市内視察(小倉城・小倉城庭園、北九州市環境ミュージアム、北九州市いのちのたび博物館)
7日目	チェックアウト、福岡空港より帰国

や産業保健システムについての概論や職業がんと職業病予防対策から職場のメンタルヘルス対策まで幅広く行いました。 本学ストレス関連疾患予防センターでは、実際に自分自身が被験者となってストレスの簡易測定を体験し、その結果に一喜一憂するなど興味をもつて見学という言葉が、耳からし耳にした「過労死」という言葉が、耳から離れないようでした。

「日本の産業保健の歴史」等の講義

また、工場見学では、単に見学にとどまらず、自分自身が産業医や産業保健スタッフになったつもりで見てもらい、職場の危険源が何か、どこにあるか、働く人の健康を守るためにはどうすべきか、を見学後に議論して、産業保健の理論と実際の適用についての実習として活用しました。 滞在4日目には、本学学長や学生有志が参加する立食形式の昼食

が降り、雪を窓越しに眺めながらの開講式となりました。 ●講義と見学のバランスに留意して構成しました。 産業保健の歴史、産業医制度



フィジーのダンスを披露



学生との昼食会



全員無事にプログラムを修了



北九州市環境ミュージアムにて

会を行い、学生同士の交流の機会を設けました。短い時間でしたが、すぐに打ち解けた様子で、お互いの国の医学教育制度等について会話が弾んでいました。食後には、まずフィジー国立大学の学生より歌の披露がありました。それに応えるべく、本学の学生も即興で日本の歌を披露しました。本学の学生にとっても貴重な交流の機会となりました。

閉講式には、本学の教職員も多数参加しました。閉講式終了後、フィジーの学生一行がこのプログラムのためにあつらえたおそろいのユニフォーム姿でフィジーのダンスを披露してくれたのが印象的でした。

土曜日には、本学の所在地である北九州市にある小倉城などを見学し、日本文化の一端に触れていただくことができました。

冬の寒さが厳しい中でしたが、体調不良者も出ることなく無事にプログラムを修了することができました。受入れを通じて、引率の先生の指導が行き届き、学生のみなさんが熱心でまじめな姿勢が印象的でした。

今回の引率者であるドナルド・ウィルソン学科長は、本学に大学院生、その後教員とし

て計11年間本学に在籍していた方で、帰国後は、フィジーの産業保健の基盤となる人材養成に奔走されています。さらさらサイエンスプログラムの参加がきっかけとなって、第2、第3のドナルド先生が出てくることを期待しながら一行をお見送りした次第です。

●「産業保健の意義と重要性の理解」を達成

学生の感想からは、産業保健制度や考え方や健康診断施設や研究用機材といったフィジーに存在しないものに触れる機会は、どれも目を見張る経験であったという声がかれましました。自国から一歩外に出ると、今まで見たことない世界があることを学生らに実際に経験してもらえたことは、彼らの今後に大きな影響を与えると考えます。これからのフィジーの将来を担う一員として、今回の学びを役立てたいと話す学生や、フィジーには産業保健関連の学位が取得できる教育機関がないためできれば日本で研究してみたいといった希望を話す学生もみられました。本事業により、日本での学びを自国の状況と比較し、さらに、自国の状況改善のためにはどうすべきかを問い直すきっかけとなつたことが分かったことは、今回の目標であった「産業保健の意義と重要性の理解」を達成したと言えるのではないのでしょうか。

●国際共同研究を立ち上げる構想も

今後日本、特に本学がこれまで蓄積してきた知識や経験を共有し、フィジーを中心として周辺国の産業保健分野の発展に寄与することを望みます。フィジー国立大学医学部と産業医科大学では、国際共同研究を立ち上げようという構想があり、今回の交流はその地ならしにもなりました。共同研究や交流協定の締結等、引率者を始め来学した学生が中心的役割を果たして、協力関係を継続、発展させていくことができれば光栄です。